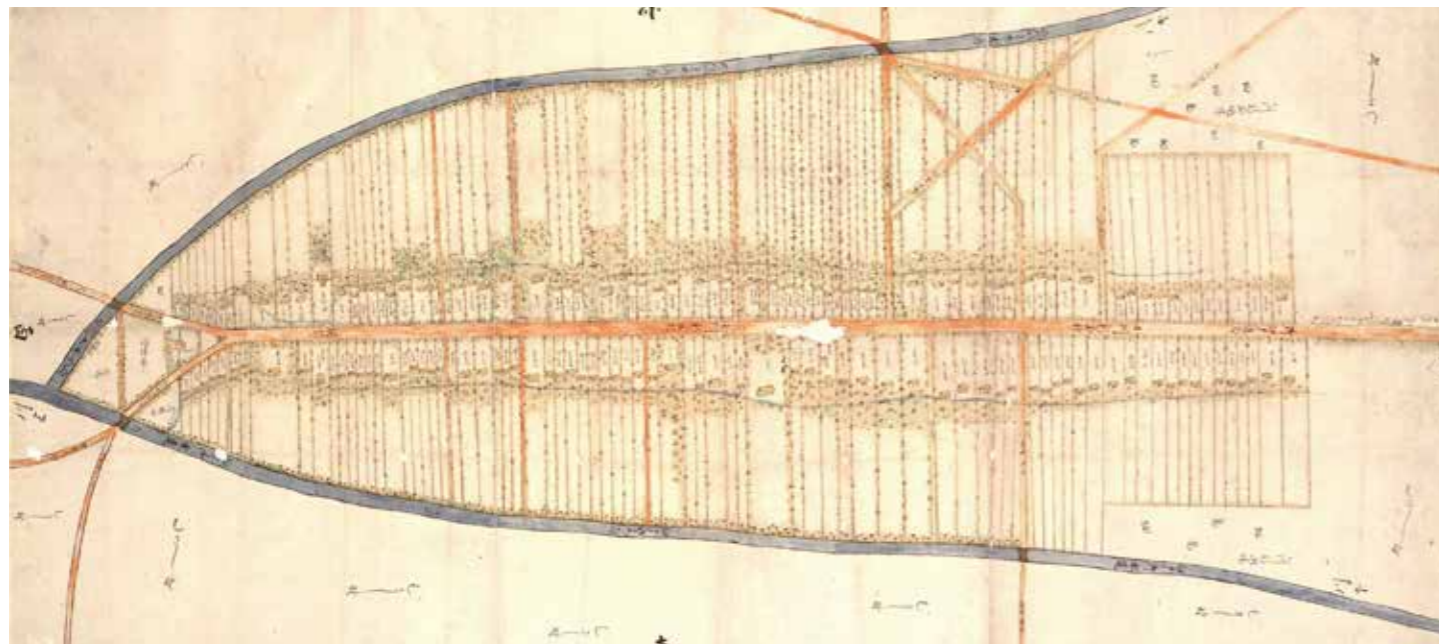


市制施行60周年記念特集地図でたどる小平

戦国時代までの武蔵野は、付近に大きな川がなく、地下水位も低かったため、飲料水の入手が困難で、人が定住できる場所ではありませんでした。徳川家康が江戸に幕府を開くと、江戸は急速に発展します。武蔵野には、江戸に物資を運ぶ道路や水を引くための上水道が整備されました。承応3年(1654)には、羽村から江戸まで多摩川の水を運んだ玉川上水が開通し、翌年に野火止用水が完成して、武蔵野の新田開発が進められます。



描かれた小川村
現在の小川町1丁目
延宝2年頃「小川村
地割図」(小川家文書)

小川村で最も古い地図です。南側に「江戸御水道(玉川上水)」が流れ、西端から分水された「のびとめ水道(野火止用水)」が北東へ向かっています。中央を左右に走るオレンジ色の太い線が今の青梅街道です。小川村の景観を特徴付けるのが、青梅街道沿いの短冊型地割です。整然と計画された短冊型の地割の様子は、今もうかがうことができます。令和2年、この絵図をお持ちだった小川九郎兵衛の子孫の方から小平市に寄贈され、今では小平市中央図書館に保管されています。

小平のはじまり～七つの村から

現在の小平市域は、江戸時代前期と中期(享保期)の開発によって成立した村々からなっています。近世以降に開発された村を、一般に「新田村」と呼びますが、この新田村7か村のみで市域が構成されているという点は、近隣の自治体でもあまり例がなく、小平の特徴といえます。



小川村	中島町・栄町・小川町・小川西町・小川東町・たかの台・津田町・学園西町の辺り
小川新田	仲町・学園東町・学園西町・喜平町・上水本町・上水新町の辺り
野中新田善左衛門組	天神町・鈴木町・上水南町・御幸町の辺り
野中新田与右衛門組	花小金井・花小金井南町・大沼町の辺り
鈴木新田	鈴木町・花小金井南町・上水本町の辺り、天神町・御幸町・上水新町の一部
大沼田新田	大沼町・美園町の辺り、天神町・花小金井の一部
廻り田新田	回田町の辺り、鈴木町の一部

市で最も古い小川村

小川村は、明暦2年(1656)に、小川九郎兵衛の主導によりひらかれます。九郎兵衛は石灰伝馬継など往来の人馬を助けるために自費をもって新田開発を願います。現小平市域では最も古い村です。



野火止用水(左)と新堀用水(右)の分水口
1957年飯山達雄氏撮影・喜平図書館蔵

小川新田



小川新田の開発は、享保七年(1722)に、小川弥市と小川村が願い出たことにはじまります。「東は小川村境から一本榎まで、南北は玉川上水際から山口領江戸道まで開発したい」といった内容の願書を差し出します。同9年に許可され、双方に開発地が割り渡されました。

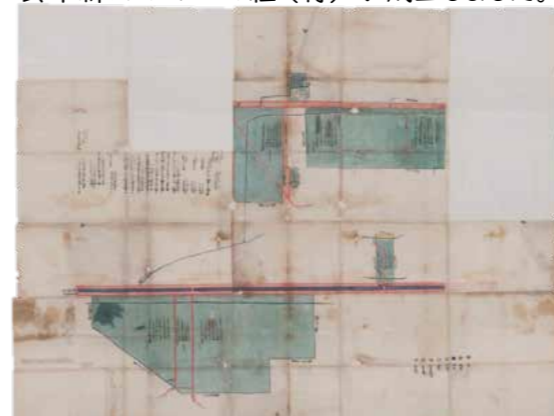
武蔵野乃一本榎跡

宝永元年(1704)、武蔵野にそびえ立ち、青梅街道を往来する人々の目印となっていた一本榎。

当時の榎は枯木となり、現在は孫木にあたります。

野中新田善左衛門組 野中新田与右衛門組

野中新田は、享保期に成立した武蔵野新田のうち、開発当初は最も面積の広い村でした。享保17年(1732)10月には、与右衛門・善左衛門・六左衛門・利左衛門の4名に名主が命じられ、野中新田与右衛門組・善左衛門組・六左衛門組(現国分寺市)、鈴木新田の4つの組(村)が成立しました。



描かれた野中新田善左衛門組
明治2年9月「(村絵図)」(野中家文書)
青梅街道や五日市街道など、各街道に沿って家が描かれており、当時の家数と一致する。

鈴木新田

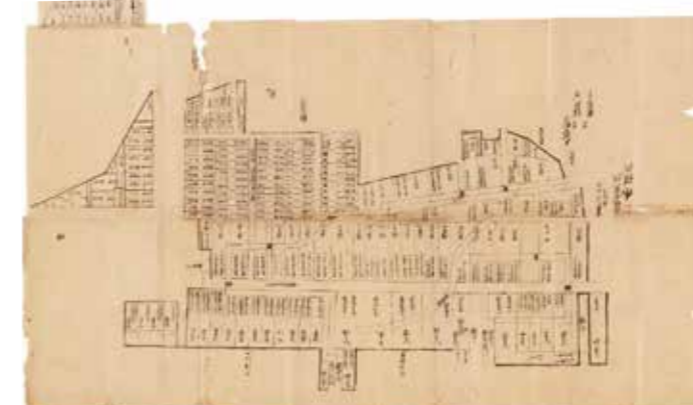
鈴木新田は、貫井村(現小金井市)の名主鈴木利左衛門と百姓が開発を何度も試み、享保9年(1724)ようやく許可されました。その後も一時、野中新田に含まれたことがありました。



鈴木新田名主の家 昭和32年

大沼田新田

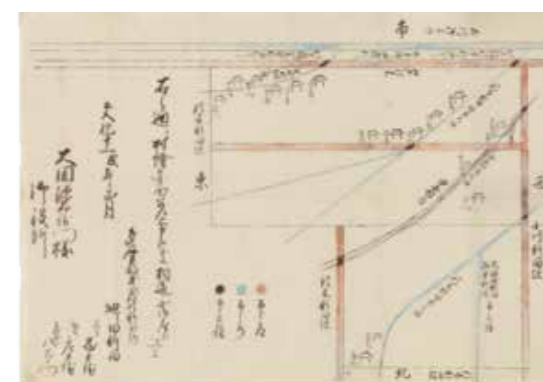
大沼田新田は、大岱村(現東村山市)の當麻弥左衛門らが開発を主導した村です。地割図からは東西を貫ぐ「大岱新田南通り」(現東京街道)や所沢道など、街道に沿って地割されていることがわかります。



大沼田新田の地割図 享保21年3月「(村絵図)」(當麻家文書)

廻り田新田

廻り田村(現東村山市)を本村とする新田で、他の村に比べて開発に関わる時期は若干遅く、家数も江戸時代後期には十五軒前後と、7か村では最も面積が狭い村でした。



文化11年(1814)「村絵図」(齊藤家文書)
玉川上水と五日市街道・小川新田境(廻り田道)などの道と、多くの水路が描かれている。